

社会人が学ぶ大学像を探る

—— 公開講座・公開授業受講生アンケートをもとにした分析 ——

仲 嶺 政 光

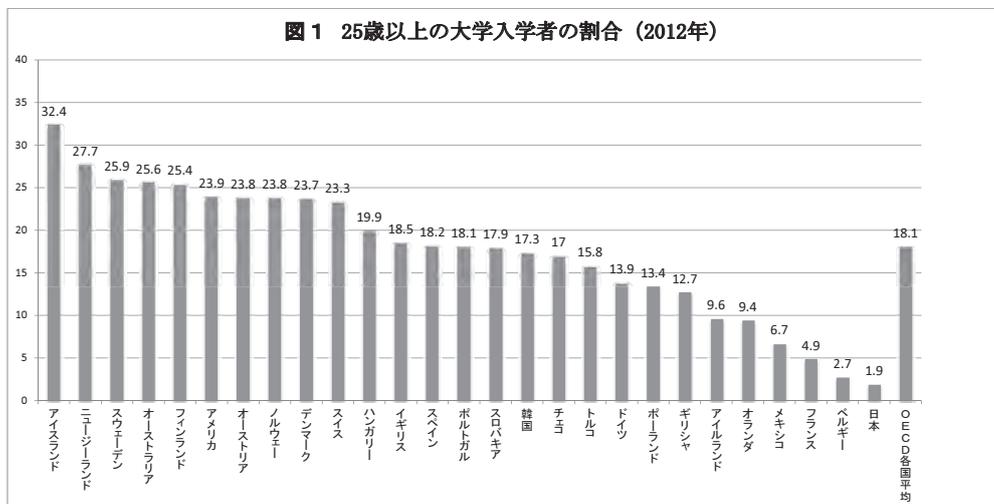
(富山大学地域連携推進機構生涯学習部門准教授)



- ▲ 18歳のとき家庭の事情で大学に行けませんでした。昨年会社を退社、18歳のときに叶えられなかった事が今望みどおりになっております(2003年度公開授業受講生、50代女性※)。
- ▲ 現在60代半ば、大学進学が難しい状況にあって断念した学習や専門的知識に対する欲求を今果たしたいという想いがあります(2013年度公開講座受講生、60代女性※)。
- ▲ 私は高校卒業後、大学というものに行きたかったのですが、その方向に進むことができなかったため、公開授業は自分にとってとても新鮮で嬉しく感じています(2015年度公開授業受講生、40代女性※)。
- ▲ 社会人入学が考えられない世に育ったことを残念に思っている(2013年度公開講座受講生、70代女性)。
- ▲ 60歳までは現役なので、入学したくてもできないのが実情なのではないか。私もリタイア後、ようやく夢かなえています。本当は仕事をしながら大学で学びたかった一人です(2013年度公開授業受講生、70代男性)。

1. はじめに

いま、18歳人口の減少により日本の大学の行く末が懸念される「2018年問題」と呼ばれるときを目前にひかえている。少子高齢化の急速な進展に直面する現代日本社会において、大学は一つの岐路に立たされるようになった。すなわち、日本の大学は社会人をひきつけ、いまよりも一層多様な世代が学ぶ場へと生まれかわり、生涯学習機関としての体制を確立していくのか、それとも18歳入学者を獲得するための熾烈な大学間競争へと向かっていくのか、という問いに潜在的にはあるが向き合っているのである。OECD(経済協力開発機構)及び文部科学省の調べによれば、日本における25歳以上の大学入学者の割合はきわめて低く(図1参照)、18歳入学者が多勢を占めるその状況はかなり異様な年齢構成環境にあることを思わせる。日本の大学は、地域社会に向けて開かれた存在となり、これまでよりも一層社会人との接点を確保し発展させていくことが不可欠であると考えられる。



出典：文部科学省HP 中央教育審議会(第99回)配付資料3-2(2)より転載。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/1356851.htm

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2015/04/15/1356851_3_2_2_1.pdf

本研究では、富山大学の公開講座受講生とオープン・クラス（正規学生向けの授業を公開するもので単位の付与は無し、2002年度後学期より実施、以下OCと略記する）受講生を対象として、質問紙による意識調査をおこなった。大学開放は、①大学教育の「時空間的拡張」、すなわち正規授業を学外者に対して開放することと、②「機能的拡張」、大学の資源を「学外者のニーズに適合するように再編成して開放する」ことの2つに大別できるとされている¹⁾。公開講座受講生とOC受講生は、ひとしく大学教育の部分利用をおこなっている点で共通するが、①はOC、②は公開講座にそれぞれ分類されるものと考えてよいだろう。これら大学開放の利用者は将来の社会人入学予備軍とみなすことができるのだろうか？ とりわけ、＜公開講座→OC→社会人入学＞というような段階的図式が成り立つといえるのだろうか？ 以下、本研究では公開講座・OCの両者を比較しつつ、大学開放の利用者が大学での学びについてどのような考えを持ち、大学教育にどのような期待を抱いているのかを探る。その上で、社会人入学の将来展望について考察することにしたい。

2. 調査の概要

2013年度の富山大学公開講座とOCの受講者延べ872人に対し質問紙と返信用封筒を配布し、郵送にて回収した（調査期間2013年4月～2014年3月）。その結果、392件（回収率45.0%）の回答を得た。このうち、複数の講座・講義への参加により質問紙への回答が複数回にわたったケース（「2回目」「3回目以上」）を除外したところ、最終的な有効回答件数は257件（29.5%）となった。

本調査における質問紙の構成は以下の通りである。(1) 性別、年齢、学歴など、回答者の基本的な属性、(2) 回答者の文化資本²⁾、(3) いま学習していることの意味、(4) 公開講座・OCに参加した結果抱いた印象、(5) 好みとする教育方法、(6) 望ましいと考える大学開放の運営方向、(7) 公開講座・OCへの参加に際し困難と感じたこと、(8) 社会人が正規学生として学ぶことに関する印象、などである。なお、本調査で得られたデータの他に、毎年大学開放参加者に対して満足度を測るためにおこなっている質問紙調査の自由記述データ（引用部分末尾に※印をつけて本調査のデータと区別した）も適宜利用することにした。

3. 回答者の基本的属性

公開講座・OCごとに回答者の属性をクロス表で示したのが表1である。

表1 回答者の受講種別と性別・世代・職業・最終学歴のクロス集計

		性別 ***		世代 **		職業 *		学歴 ***	
		男性	女性	50代以下	60代以上	無職	有職	非四大卒	四大卒以上
公開講座	人数	55	114	94	75	79	89	79	90
	%	32.5%	67.5%	55.6%	44.4%	47.0%	53.0%	46.7%	53.3%
OC	人数	54	34	32	56	55	33	21	67
	%	61.4%	38.6%	36.4%	63.6%	62.5%	37.5%	23.9%	76.1%
合計	人数	109	148	126	131	134	122	100	157
	%	42.4%	57.6%	49.0%	51.0%	52.3%	47.7%	38.9%	61.1%

χ^2 検定：*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

性別でみると、公開講座受講生は女性の割合が高く、OC受講生は逆に男性の方が高くなっている。50代以下／60代以上で区分した世代別にみると、公開講座はほぼ半分ずつの割合になっているが、OCは60代以上の割合が高くなっている。これはOCのほとんどが平日昼間に実施され、公開講座が平日夜間や土日に実施されていることが背景にある。このことは有職・無職の別とも関連していて、OCは有職者に比べ無職者の割合が高くなっている。受講生の最終学歴を四年制大学卒／非四年制大学卒（高卒、専門・短大・高専卒）に分けてみると、公開講座はほぼ半分ずつの割合になっているが、OCは高学歴の傾向がみられる。ちなみに、ここで公開講座・OC受講生の四年制大学卒の割合を世代別にみると、30代以下が41.4%、40～50代が67.0%、60代以上が61.1%となっており、大学進学率の世代差を勘案すると、とりわけ40代以上の高学歴傾向は明瞭である³⁾。

なお、受講申請時に得られた全体の性別・世代別データをみると、(1) 公開講座では男性34.4%／女性65.6%、50代以下60.4%／60代以上36.5%、(2) OCでは男性65.1%／女性34.9%、50代以下28.4%／60代以上67.3%となっている。本調査の回答結果と比較すると、公開講座・OCとも性別と世代に大きな偏りはみられなかった⁴⁾。

4. 公開講座とOCの比較

引き続き、公開講座・OC受講生にはどのような相異点があるかを確認してみよう。ここでは、各質問項目（4件法の選択肢「あてはまる」＝4、「ややあてはまる」＝3、「ややあてはまらない」＝2、「あてはまらない」＝1というように段階的に得点を与えた。これ以下の質問項目も同様。）への回答結果の平均値を比較することにしたい。表2は、t検定により有意な差がみられた質問項目を列挙したものである。

表2 t検定による公開講座・OCの比較（有意な差のあった項目）

	公開講座	OC	t値（自由度）
①学ぶことの意味			
がんばった分だけ認められる ***	2.34	> 1.79	t (249) = 4.60
学習・研究仲間をつくることのできる ***	2.66	> 2.13	t (252) = 4.36
昇進や出世に役立つ *	1.54	> 1.35	t (227) = 2.34
他人との競争は学習の励みになる **	2.05	> 1.69	t (251) = 3.07
②受講の結果			
受講して知り合いが増えた ***	2.73	> 2.08	t (253) = 4.98
受講して知識を活用する機会が増えた *	2.78	> 2.52	t (251) = 2.18
受講生どうしの交流の機会がほしい *	2.60	> 2.32	t (253) = 2.33
一人より複数で学んだ方が効果的だった **	3.19	> 2.80	t (138) = 3.30
質問やディスカッションの機会があった ***	3.25	> 2.59	t (136) = 5.08
担当講師には気さくさがあった **	3.65	> 3.41	t (154) = 2.85
③好みとする教育方法			
黒板とチョークを使って説明する講義 ***	2.38	< 3.03	t (190) = 5.30
担当講師と受講生が対話しながら進める講義 **	3.07	> 2.68	t (252) = 3.44
講義内容の順序や進度を受講生に合わせる講義 ***	2.78	> 2.38	t (251) = 3.54

④大学開放の運用方針			
地域社会に対する教育サービスに努力すべきである *	2.87	>	2.57 t (159) = 2.45
日常の実用的な内容を重視すべきである *	2.52	>	2.22 t (247) = 2.43
社会人受講生には特別な配慮をすべきである **	2.41	>	2.10 t (250) = 2.66
ゼミナールなど少人数の科目も公開すべきである *	2.97	>	2.72 t (140) = 2.18
⑤受講上の困難			
同世代の受講生がいなくて居心地が悪かった ***	1.38	<	1.81 t (128) = 3.95
質問しにくい雰囲気があってできなかった **	1.32	<	1.60 t (147) = 3.26
⑥社会人正規入学について			
学位の取得に魅力を感じる *	2.30	>	1.99 t (243) = 2.10
資格の取得に魅力を感じる **	2.63	>	2.21 t (244) = 2.84
社会人学生は社会経験を活かせると思う *	3.19	>	2.97 t (244) = 2.44

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

まず、表2のうち「①学ぶことの意味」「②受講の結果」の各質問項目は、学習努力の承認・評価や人間関係の広がり・活性化を内容とするものだが、その質問項目すべてにおいてOC受講生よりも公開講座受講生の値が有意に高い結果となっている。このことから、公開講座受講生の方が他者との何らかの関係性を紡ぎ出す効果をより多く享受しているものと思われる。

「③好みとする教育方法」についてみると、OC受講生が「黒板とチョークを使って説明する講義」という今日ではやや保守的な部類にみなされつつある教育方法——もちろん、いまなお十分有効な方法の1つには違いないが⁵⁾——を好むのに対し、公開講座受講生は「担当講師と受講生が対話しながら進める講義」「講義内容の順序や進度を受講生に合わせる講義」といった受講生への配慮を含む教育方法を好んでいる。このことと関連した結果といえるものであるが、「④大学開放の運用方針」の各質問項目⁶⁾のいずれにおいても、公開講座受講生はOC受講生よりも大学開放の拡大と社会人向けの工夫を求めるといった結果（相対的にはあるがOC受講生は現状肯定派ということになる）となっている。

- ▲ 社会人入学者は今後も需要があり増えていくと予想されますが、社会人学生を受け入れるということは、教育方法も多様化していくと思われるので、教員のスキルアップが必要と考えます（2013年度公開講座受講生、50代男性、傍線傍点引用者、以下同）。
- ▲ 社会人入学の学生のニーズにも応えることのできるカリキュラムの充実が望まれるのではないのでしょうか（2013年度公開講座受講生、50代男性）。
- ▲ 学部学生と差別無く対応して下さいとあって、本当にありがとうございました（2002年度OC受講生、50代女性※）。
- ▲ OCの生徒に対しても、学生さんと同じように、とても丁寧に指導して下さいました（2015年度OC受講生、60代女性※）。
- ▲ 講義は学生さん中心に進められており、これが最良と思う。OCの受講者は、これで満足しています（2015年度OC受講生、60代男性※）。
- ▲ 講義の世界の空気が好きだ（2003年度OC受講生、60代男性※）。

OC受講生は正規学生の授業に直接参加している人びとであり、公開講座受講生よりもありのままの大学教育に挑戦する存在である。20歳前後の似通った年齢で構成される大学の講義室に、多くの場合一人か数人程度で乗り込んでいくOC受講生は、「⑤受講上の困難」にみるように居心地

の悪さや質問しにくい学びの雰囲気の中であえてこれに参加する意志の強さがある。

- ▲ 講義は一方的な事がほとんどですが、もう少し質問などできるようになればよいと思います。(2003年度OC受講生、60代男性※)。
- ▲ お仲間がおらず、とてもさみしかったです。あまり皆さんこのOCのことをご存知ないようです。PRしてください(2002年度OC受講生、40代女性※)。
- ▲ OC受講者が少ない(小生のみ?)。しっかりPRして参加者が多くなるように工夫されたい(2014年度OC受講生、60代男性※)。
- ▲ 良い環境と質の高い授業に、感謝しています。いわゆる「趣味」としてではなく、本気で学びたいと思った時に、このような機会に出会うことが出来て、恵まれていたと思います(2013年度OC受講生、40代女性)。
- ▲ 社会人に対して窓口を開いて下さいましてありがとうございました。勇気がいりました。知ることのなかった生活にとびこみ、若いエネルギーを感じながら人生をリフレッシュすることができました(2013年度OC受講生、60代女性)。

大学の講義、特にそれが一斉方式の場合には「質問すると自分の単純さや愚かさが暴露されてしまうので、お互いに質問を差し控える」雰囲気が生じやすい。OC受講生は、そのような独特の緊張感がたゞよう場⁷⁾への馴化が一定程度求められることになる。そうした条件下におかれることでOC受講生は自らの学習計画や参加の仕方についての可能性や限界があることに自覚的になりやすいものと思われる。「⑥社会人正規入学について」にみるように、OC受講生は公開講座受講生よりも学位や資格の取得、社会経験を活かすことなどについても消極的であり、冒頭で述べた<公開講座→OC→社会人入学>という段階的図式はただちには成り立たないようにみえる。

このようにOC受講生は、大学開放の種類からして準-正規学生と位置づけられてよい存在でありながら、公開講座受講生よりも大学開放全般に控え目な回答が目立ち、やや意外ともいえる結果をみせている。だが、講義を担当した教員によれば、OC受講生の学習意欲の高さ、生真面目な態度が教室の雰囲気を良い方向へと変えるものと評価する意見がある点は注目すべきことであろう⁸⁾。

- ▲ 受講生の方の態度はとても真摯で誠実なものでした。教室全体に良き秩序と礼節がもたらされたと感じました(2008年度OC担当教員※)。
- ▲ 一般市民の中でも特に勉学意欲の高い方々が受講されていることが多いため、本学学生だけの場合と異なり、適度の刺激と緊張感が得られた。本学学生達にも良い刺激になっていると思う(2013年度OC担当教員※)。
- ▲ 本学学生が多様性に慣れるためにも良い制度であると思います。講義型科目では積極的に開放してもいいと思います(2014年度OC担当教員※)。

5. 社会人入学に対する意識

公開講座やOCを受講した結果「大学に正規学生として入学しなくなった」という質問項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した者は26.1%にとどまるものの、反対に「社会人入学には興味・関心がない」という質問項目に対して「あてはまらない」「ややあてはまらない」と回答した者は72.0%にもものぼっている。社会人入学拡大の可能性を感じさせる結果である。

- ▲ 主婦を含む社会人に対する編入学などの枠をもっと多くして欲しい。やはりOCでは、紛れ込んだ子犬の様で肩身が狭い思いがした（2003年度OC受講生、60代男性※）。
- ▲ OCを聴講して非常に良かったと思いました。社会人選抜の門が広がったら、学生になりたいと思いません（2007年度OC受講生、60代男性※）。

ここでは、社会人入学希望の有無がどのような要因に規定を受けているのかを検討したい。表3は、「大学に正規学生として入学しなくなった」「社会人入学には興味・関心がない」を従属変数とし、受講生の属性とともに社会人入学に（肯定的にも、否定的にも）関連した5つの質問項目への回答結果を独立変数とした重回帰分析の結果である（質問項目ごとに2回実施した）。

表3 社会人入学の希望の有無を従属変数とする重回帰分析結果

独立変数	大学に正規学生として入学しなくなった			社会人入学には興味・関心がない		
	B	ベータ	有意確率	B	ベータ	有意確率
定数	2.43		0.000 ***	0.70		0.273
性別ダミー（男性=1）	0.31	0.16	0.015 *	-0.04	-0.02	0.723
年齢ダミー（60代以上=1）	-0.32	-0.17	0.012 *	0.28	0.15	0.020 *
学歴（就学年数）	-0.15	-0.24	0.000 ***	0.06	0.11	0.100
文化資本	0.09	0.09	0.145	-0.19	-0.20	0.002 **
今回よりステップアップした講義を受けたい	0.29	0.22	0.000 ***	-0.15	-0.12	0.040 *
大学の講義は敷居が高いと感じた	0.28	0.19	0.002 **	-0.05	-0.04	0.529
学位の取得に魅力を感じる	0.21	0.24	0.000 ***	-0.21	-0.25	0.000 ***
学部よりも大学院に興味・関心がある	0.22	0.21	0.002 **	-0.04	-0.04	0.580
入学金・授業料の捻出が難しいと思う	-0.07	-0.07	0.262	0.26	0.29	0.000 ***
社会人が正規学生になるのは違和感がある	-0.19	-0.15	0.009 **	0.37	0.31	0.000 ***
調整済みR ²		0.285	0.000 ***		0.279	0.000 ***

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

表3左欄、「大学に正規学生として入学しなくなった」のベータ値（標準化係数）を絶対値で見ると、「学位の取得に魅力を感じる」「学歴（就学年数）」「今回よりステップアップした講義を受けたい」「学部より大学院に興味・関心がある」が比較的高い値を示している。

学歴・学位取得は制度化された文化資本の一つとされ、例えばよりよい就職や転職を実現するなど「人が人生において収める成果と学歴資格の相関は強くなる」⁹⁾ 性質を帯びるものである。従って、現状で社会人入学に魅力を感じているのは50代以下の非シニア層と非高学歴層（年齢と就学年数における負の相関）に多いという結果となっている。

他方、受講した講義の「続編」が聴きたい、すなわち「今回よりステップアップした講義を受けたい」の値が高いことは自然な結果というべきであろう。富山大学OCでは比較的数量多くの講義（年間800科目程度）が公開されているものの、制度的に公開科目の系統性を考慮しカリキュラム化するまでには至っていない。今後可能な限り次なる学習段階への道筋を受講生に開いていくことが求められているといえるだろう。

- ▲ 今の講座と別にもっと厳しいクラスがあったら良いと思う（2013年度公開講座受講生、50代女性）。
- ▲ 他にも受講したい興味ある講義があるのですが、OCに入っていない【公開されていない】ので残念です

- (2013年度OC受講生、60代女性)。
- ▲ ステップアップするような講座を企画してほしい (2013年度OC受講生、60代男性)。
 - ▲ 同じクラスを2年連続で受講すると、マンネリになりやすいので、次のステップのクラスで勉強し続けられるシステムにしてほしい (2003年度OC受講生、50代女性※)。
 - ▲ 個々の法規について、続編としてより詳細な講座解説を希望いたします……ゼミ形式にしてもよいのでは。事前に検討課題を与えてその内容について議論するとか (2002年度公開講座受講生、30代男性※)。
 - ▲ 前期、某先生の講義を受けさせて頂きました。後期にも前期と関連がある講義がありますがOCは受講出来ません。たとえOCといえど系統だてて学んでいるのです。暇な時間を費いやしているではありません。OCも受講可能な科目の選定を見直してください (2015年度OC受講生、60代男性※)。
 - ▲ 同じ授業を2回、3回と受講されている方々がおり、構わないのですが、前回と同じ内容などがあると、講師の側がやや恐縮してしまったりしました (2012年度OC担当教員※)。

表3の右欄をみてみよう。左欄とは反対に「社会人入学には興味・関心がない」の結果では、「社会人が正規学生になるのは違和感がある」の値が最も大きくなっている。その「違和感」の内実については定かではないが、日本の大学が長く20歳前後の若い世代だけを対象にし続けてきた伝統がこのような印象を抱かせる結果を導いたものと考えられる。

- ▲ 社会人の受講は一人だけだったので、場違い？な感じを持ちました (2015年度OC受講生、60代男性※)。
- ▲ 数多い現役の学生(2年生)の中で、小生一人受講していたので、学生達は奇異に感じたのではないのでしょうか? (2013年度OC受講生、70代男性)。
- ▲ 一般の学生にOCについて説明してほしい。何故、年配者が受講しているのか不思議に感じているようだ (2013年度OC受講生、60代男性)。
- ▲ 学生たちは社会人が入ってくるのをどう思っているのかな? (2013年度OC受講生、60代女性)。

これに続いて、「入学金・授業料の捻出が難しいと思う」もまた高い値を示している。日本の大学の学費支出額は世界先進国でも最も高い部類に属しながら、その負担軽減策(給付型奨学金など)においてきわめて低い水準にあることが指摘されている¹⁰⁾。このような経済的に厳しい条件が今後も継続するとすれば、社会人入学の拡大も遠のいたままにとどまるであろう。

このほか、「学位の取得に魅力を感じる」「今回よりステップアップした講義を受けたい」はともに「社会人入学には興味・関心がない」と負の相関があり、それぞれ継続的ないし系統的な学習を望まないという傾向がみられる。他方、文化資本の高さと「社会人入学には興味・関心がない」に負の相関があることは、やはり正規入学・学位取得が教養層をひきつける可能性を含んでいるという結果とみることができよう。

6. 新しい学習観の広がり

ところで、大学開放受講者は自らの学習をどのように意味づけているのだろうか。それは、社会人の持つ学習観と既存の大学教育のあり方がいかなる整合性を確保しうるのかを検討する材料となるものである。回答者にいま学んでいることの意味についてたずねた11の質問項目¹¹⁾への回答に対して因子分析を実施した結果、3つの因子が抽出された(表4)。絶対値が0.4を超える因子負荷量には網掛けを施した。

表4 いま学んでいることの意味に関する因子分析結果

質問項目	因子		
	1	2	3
第1因子「個人的実益性」			
毎日の生活の中で役立つ	0.79	-0.15	0.04
仕事の中で役立つ	0.71	-0.06	0.02
世の中のためになる人間になる	0.56	0.16	0.07
誰にも頼らず一人で生きていく力になる	0.52	0.06	-0.09
がんばった分だけ認められる	0.42	0.34	0.02
第2因子「他者との関係性」			
他人との競争は学習の励みになる	-0.13	0.91	0.02
学習・研究仲間をつくることができる	-0.04	0.63	0.13
昇進や出世に役立つ	0.38	0.44	-0.06
生まれ持った才能で成果が決まる	0.08	0.41	-0.19
第3因子「知識吸収・取得性」			
より多くのことを知る	-0.01	-0.02	0.88
新しい見方・考え方が身につく	0.02	0.01	0.79
Cronbachの α 係数	0.78	0.71	0.83

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法。

3因子の累積寄与率は62.0%。

第1因子は、「毎日の生活の中で役立つ」「仕事の中で役立つ」「世の中のためになる人間になる」「誰にも頼らず一人で生きていく力になる」「がんばった分だけ認められる」の5つの質問項目で構成されている。いずれも学習が何らかの実用・実益と結びついていることから、第1因子を「個人的実益性」と名づけた。続いて第2因子は、「他人との競争は学習の励みになる」「学習・研究仲間をつくることができる」「昇進や出世に役立つ」「生まれ持った才能で成果が決まる」の4つの質問項目で構成されている。これらは自らの学習を他者との関係の中で位置づけようとするものである。昇進・出世などは実益とも受け取れるが、他者との相対的な位置関係の上昇を重視するものともみることができる。よって、第2因子を「他者との関係性」と名づけた。第3因子は「より多くのことを知る」「新しい見方・考え方が身につく」の2つの質問項目で構成されている。知識や認識を深めるという内容であり、第3因子を「知識吸収・取得性」と名づけた。

大学開放受講生の学習観を背後で規定するこれら3つの因子が抽出されたことをどのように解釈することが可能だろうか。まず、第3因子「知識吸収・取得性」は教育・研究機関である大学の営みを下支えし、参加意欲の高さを象徴する基礎的な位置を占めるものと考えられる。これに対し第1因子と第2因子は、これまでの大学の伝統には含まれてこなかった新たな課題が浮上してきていることを思わせる結果とみることができる。すなわち、一方で第1因子「個人的実益性」は受講生個人の持つ生活や職業などに基づいた興味・関心が軸にあり、大学が伝統的に維持してきた内的自律性や権威の自明性と必ずしも合致・整合するとは限らず¹²⁾、何らかの新たな対応・変容を促す契機が含まれている可能性がある。例えばOJTの縮小という今日的労働環境を補完する役割を大学に期待する、という意見がある。

▲ **社会人入学は大変重要と思っています。昨年迄会社に勤務していましたが、企業の社内教育力の低下を強**

く感じています。管理技術教育、理工学教育について大学に期待することが非常に大きいです（2013年度OC受講生、60代男性）。

このように大学の内的自律性に変容が期待され、社会貢献へのシフトを試みる動きは今日では珍しいことではない¹³⁾。その背景には、情報化・消費社会化の進展による「知の拡散状況」「各種知識の水平化」といった知識の権威的性格の崩壊¹⁴⁾や大学教育に即時的な効果を求める風潮の広がりもあるだろう。そして他方、第2因子「他者との関係性」、すなわち競争や連帯などの関係性重視は、受講生相互の交流を含み込むのに適的な新しい教育内容・方法・評価法が求められることにもつながってくる。このことは、近年の大学教育で進められているアクティブ・ラーニング的手法の導入などを想起させるものである。

3つの因子それぞれから算出された因子得点について、30代以下、40～50代、60代以上の3つの世代の平均値を一元配置の分散分析¹⁵⁾により比較したのが表5である。ここで注目すべき点は、30代以下の若い世代が3つの因子とも60代以上の世代よりも有意に高い値を示していることにある。すなわち、個人的実益性や他者との関係性、及び知識吸収・取得性について低い値にとどまる60代以上の世代は、現状の大学開放から得られる実益にこだわらず、独学的で自己完結的な学びに携わるのに対し、大学に何らかの変容を求める大学開放拡大志向¹⁶⁾を相対的に強く持つ若い世代が今後台頭してくることが予想されるからである。

表5 世代ごとの各因子得点平均値の比較（一元配置の分散分析結果）

	① 30代以下	② 40～50代	③ 60代以上	多重比較
個人的実益性因子	0.46	0.16	-0.24	①②>③ **
他者との関係性因子	0.51	0.08	-0.18	①>③ **
知識吸収・取得性因子	0.40	0.00	-0.10	①>② * ③ **

** p<0.01 * p<0.05

- ▲ 私のように、定年後の学習に参加される人は増えると思います。それが、何かの為になるかは余り気にはしていません。学ぶこと自体に興味があります（2013年度OC受講生、60代男性）。
- ▲ リタイア後に新たに勉強を始めるのが「念願」でした。素晴らしい講義と環境に感謝しています。時間を青春時代にリセットして、ただ学ぶだけでよいキャンパスライフを謳歌しています（2003年度OC受講生、60代男性※）。
- ▲ 大きなスペースの講義室、また大人数の受講生の講義の方が集中できる。逆の場合、授業内容に興味があっても躊躇して申し込みできない（2011年度OC受講生、60代男性※）。
- ▲ 現在の社会において、学生時代の最終学歴が重視されている状況ですから、社会に出て得た経験や、修得した資格を認め、昇格あるいは地位を上げる条件にはならず、ただただ自己の品格を高める一つのステータスにすぎないのは残念に思っています（2013年度公開講座受講生、70代男性）。

各因子得点に世代差があることを念頭に置きながら、それらが社会人入学への接続に関連する質問項目とどのような関係があるのか、もう少し詳しくみてみよう。表6は、3つの因子得点を従属変数とし、回答者の属性、正規入学希望の有無、新・旧教育方法の選好性（黒板とチョーク／グループ作業やディスカッション）を独立変数とした重回帰分析の結果である（因子ごとに3回実施した）。

表6 各因子得点を従属変数とする重回帰分析結果

独立変数	個人的実益性因子			他者との関係性因子			知識吸収・取得性因子		
	B	ベータ	有意確率	B	ベータ	有意確率	B	ベータ	有意確率
定数	0.52		0.446	0.57		0.408	0.50		0.475
性別ダミー（男性=1）	-0.07	-0.04	0.552	-0.05	-0.03	0.709	0.02	0.01	0.880
年齢	-0.15	-0.22	0.001 **	-0.14	-0.20	0.002 **	-0.14	-0.21	0.002 **
学歴（就学年数）	-0.02	-0.04	0.563	-0.05	-0.08	0.227	-0.02	-0.04	0.556
文化資本	0.16	0.18	0.006 **	0.17	0.19	0.005 **	0.30	0.32	0.000 ***
大学に正規学生として入学しなくなった	0.21	0.22	0.001 **	0.17	0.18	0.006 **	0.13	0.14	0.031 *
黒板とチョークを使って説明する講義	-0.12	-0.13	0.047 *	-0.04	-0.04	0.545	0.08	0.09	0.176
グループで作業やディスカッションする講義	0.22	0.22	0.000 ***	0.25	0.26	0.000 ***	0.05	0.05	0.434
調整済みR ²		0.221	0.000 ***		0.203	0.000 ***		0.158	0.000 ***

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

これをみると、3つの因子に共通しているのは、年齢の高さとの比較的強い負の相関があること（表5で平均値の世代差を比較した結果と符合している）、正規入学の希望および文化資本量の高さと正の相関があることである。また、個人的実益性因子・他者との関係性因子に着目すると、教育方法としてグループ作業・ディスカッションを好むという点と比較的強い相関があることが共通している。個人的実益性因子はまた、黒板とチョークという教育方法と負の相関がみられる。

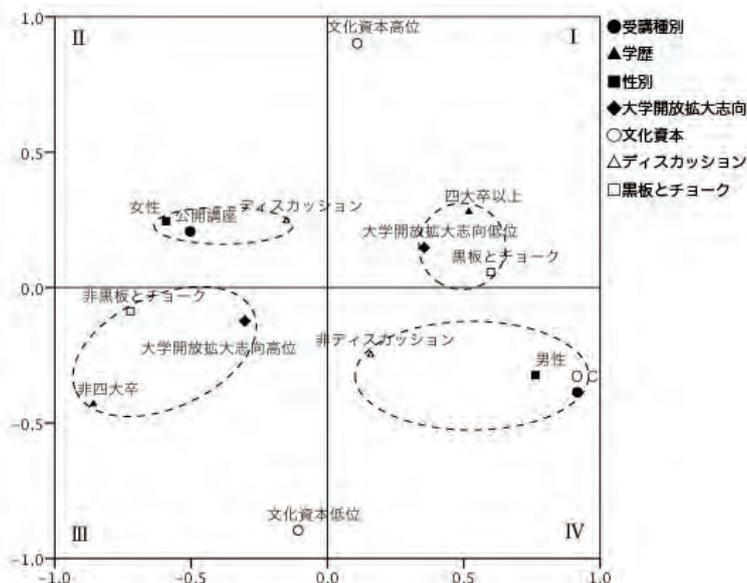
それぞれ既に述べたことを再確認する結果といえるが、現代の大学開放は、学びに代代的差異があるため大学に対する要望は多様な状況にあること、そして大学に新しい教育内容・方法・評価法を求める意見が優勢になることが将来的に予期されること、をそれぞれ考慮した大学開放の計画が求められている、といえるだろう。

7. おわりに

(1) 大学開放をめぐる布置状況：＜公開講座→OC＞の検討

図2は、受講種別（公開講座・OC）、学歴（四大卒・非四大卒）、性別（男性・女性）、大学開放拡大志向（高位・低位）、文化資本（高位・低位）、「黒板とチョークを使って説明する講義」「グループで作業やディスカッションする講義」（いずれも2値）を投入変数として実施した多重コレスポネン分析¹⁷⁾の結果であり、これまでみてきた本研究の分析を一部要約するものとなっている。

図2 多重コレスポネン分析による布置状況



ここでは、大きく4群にグループ化した布置状況を示している。第Ⅰ象限には大学開放拡大志向「低位」があり、その近傍には四年制大学卒と黒板とチョークが位置している。その対になる形で第Ⅲ象限には大学開放拡大志向「高位」、非四年制大学卒、非黒板とチョークが位置している。また、第Ⅱ象限には女性、公開講座、グループ作業・ディスカッションがあり、第Ⅳ象限にはその対になる形で男性、OC、非グループ作業・ディスカッションが位置している。

座標横軸に着目すると、左側には大学開放拡大志向「高位」があり、そこには女性、公開講座、非四年制大学卒、新しい教育方法を好み、現状の変革を牽引する格好になっている。反対に右側には大学開放拡大志向「低位」があり、男性、OC、四年制大学卒、伝統的な教育方法を好む保守的な勢力をなしている。座標縦軸に着目すると、文化資本量の多さにより上方・下方に分かれ、上方には女性、公開講座、四年制大学卒が、下方には男性、OC、非四年制大学卒がそれぞれ相対的に位置している。既に4. で述べたことだが、この上下の布置状況を見ると、＜公開講座→OC＞というような、前者から後者へと発展ないし移行する関係というよりも、性別や新・旧教育方法の選好性などによって異なる位置関係を示していることから、互いに異質な学びの場として並立し棲み分けがなされている状況をうかがわせる。

(2) 大学開放の継続実施の意義：＜大学開放→社会人入学＞の検討

そもそも公開講座やOCへの参加経験は社会人入学へと連結するものと考えてよいものだろうか。ここでは、大学開放に継続的に参加することによりどのような意識の変化があるのかをみてみよう。受講回数に関する質問について、「はじめて受講」=1点、「2～5回受講」=2点、「6～10回受講」=3点、「11回以上受講」=4点というように得点を与え、これと相関があった質問項目を列挙したのが表7である。

表7 受講回数×相関があった各質問項目 (Pearson の相関係数)

	相関係数
〔学びは〕 毎日の生活の中で役立つ	-0.13 *
〔学びは〕 仕事の中で役立つ ★	-0.19 **
〔結果〕 受講して知り合いが増えた	0.14 *
〔結果〕 講義の内容はよく理解できた	0.14 *
〔教育方法〕 黒板とチョークを使って説明する講義	0.16 *
〔教育方法〕 インターネットを使って予習・復習する講義 ★	-0.21 **
〔運営〕 日常の実用的な内容を重視すべきである	-0.15 *
大学の講義は敷居が高いと感じた	-0.17 **
社会人入学は入学料・授業料の捻出が難しいと思う ★	-0.15 *

** p<0.01 * p<0.05

なお、年齢が高くなるほど受講回数が多くなる傾向 (相関係数 $r = 0.21^{**}$) があるため、年齢による効果が背後で関連している質問項目がある。これに該当したのは、「仕事の中で役立つ」「インターネットを使って予習・復習」「社会人入学は入学料・授業料の捻出が難しいと思う」の各質問項目であった。この3つの質問項目 (★) を除いた上で、ひとまず表7から読み取れるのは次の点である。まず、受講回数が多くなるほど何らかの個人的実益につながる項目とは負の相関がみられるということである。例えば「生活の中で役立つ」や「日常の実用的な内容を重視すべき」がこれ

に該当する。これは個人的実益とは異なり、学生らとの関わりを含むありのままの大学環境への参加したいに独自の価値や魅力が見出されていることを感じさせるものである。

- ▲ これで3回目になりますが、学校の雰囲気にもなじめるようになり、友達もでき私なりのひとときを過ごしています。先生や学生さんたちとの新しい出会いの場を与えていただき本当にありがとうございます（2003年度OC受講生、60代女性※）。
- ▲ OCを受講して5年が経過しました。会社を定年退職してフリーな立場で現役の学生さん達と一緒に受講をし、2度目の青春を楽しんでいます（2008年度OC受講生、60代男性※）。
- ▲ 学生さんたちと学び知識を共有できることにたまらない魅力を感じます（2015年度OC受講生、70代男性※）。
- ▲ 私の場合OCに参加したいと思うのは、キャンパス内を学生と交じって歩けたり、図書館その他の施設を自由に入出し使うことが出来る、サークル活動などにもしかして参加できる、などがあるからです。大学本来の学術学問教育の他に地域社会とのつながりに〔OCが〕関わっているのかと思います（2013年度OC受講生、60代女性）。
- ▲ OCの受講生は、どの程度大学の行事（サークル?）に参加できるのでしょうか。身近な学生さんと、直に交流する場はあるのでしょうか（2004年度OC受講生、30代女性※）。
- ▲ パソコンを使って資料を印刷し準備することも楽しかったし、授業後もパソコンで復習したり図書館も調べるのには良かったです。大食堂で食事をしました。半日学生気分を味わえて最高の楽しさでした。孫の様な学生さんたちの考えを聞くことで今を知ることも出来ました（2015年度OC受講生、70代女性※）。
- ▲ 若い学生たちと社会人の交流がそううまくいっているとは思えない（2013年度公開講座受講生、50代女性）。

また、受講回数の多さは、「講座の内容はよく理解できた」「黒板とチョークを使って説明する講座」「受講して知り合いが増えた」との正の相関、「大学の講義は敷居が高いと感じた」との負の相関があり、足繁く大学に通う経験を重ねることによって大学での学びに適応しつつ、これを身近なものとする意識が形成されていく様子もうかがえる。

さらに、今後社会人入学制度が拡大するとしても、公開講座やOCのような大学教育の部分利用に対する需要は高い状態が続くものと予想される。

- ▲ 社会人入学の制度も良いことだと思いますが、現在のようなOCの制度でなければ私自身は参加（受講）出来なかったと思います。OCのような制度も続けていただければ嬉しく、又、安心（学ぶ機会が無くならないという点で）です（2013年度OC受講生、40代女性）。
- ▲ 大学院で学ぶには、時間的、経済的にゆとりがなく、カルチャーセンター的な教室では物足りなく思う私のような人間にとっては、このOCの場はとてめありがたいチャンスです（2002年度OC受講生、50代女性※）。
- ▲ 現在の〔OCの〕やり方に、特に不都合な点があるとは思っていません。このように、単科目ずつを、思い立ってすぐ（半年以内に）受講できる制度はとてめ嬉しく、又、活用しやすいです（2013年度OC受講生、40代女性）。
- ▲ 興味のある授業に、聴講生の立場で、出席できたら嬉しく思います。いきなり、社会人入学はblankもあり、かなりハードルが高いと思うのです（2013年度公開講座受講生、40代女性）。

もちろん、冒頭に掲げた自由記述にみられるように、諸般の事情で大学進学がかなわなかった人々に向けての大学開放利用の促進や社会人入学を実現するにはいかなる条件が必要なのか、ということも考えなくてはならない。既にみたように、大学開放の利用者（特にOC）はそもそも高学

歴の傾向があり、ある種の「格差」を体現している現実があるからである¹⁸⁾。そして、既存の大学開放に比べて社会人入学・正規学生生活はかなりハードルが高いものと受けとめられており、〈大学開放→社会人入学〉という図式は何らの新しい施策なしには容易に成り立つものではないことを感じさせる。

- ▲ 社会人入学は、入学するためのハードルが、高いような気がする（2013年度OC受講生、60代女性）。
- ▲ 社会人学生になってみたいと思いますが、どうすればいいのかも正直よくわかりません。もしなつたとしてもついて行けなかったら……という不安もあります（2013年度OC受講生、60代女性）。
- ▲ 高校を卒業して数十年が経っているので、今更、大学入試センター試験を受けるのは、無理に近く、ある程度の枠の御配慮があると伺いますが、タイミングが合わず、毎年、見送りが続いています（2013年度OC受講生、40代男性）。
- ▲ 社会人として入学する場合、体力や費用を考えると4年間というのはかなり厳しいものがあります。例えば、国家資格や経歴等を単位と認め、3年次編入といったことができればと思います（2013年度公開講座受講生、60代女性）。

いま、より幅広い層に向けて開かれた大学を実現していくことが求められている。それに応えるためには、既存の大学開放を継続的に実施しつつ、大幅な社会人入学の導入にふさわしい入学・編入学試験のあり方や授業料の設定、奨学金制度の整備、そして新しい教育方法の開発・実践など、多くの検討すべき材料が残されている。

注

- 1) 小池源吾「大学開放」『生涯学習事典』増補版、東京書籍、1992年、p.153。
- 2) 文化資本を把握するための質問項目は、荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店、2004年、p.279をもとに作成した。ここでは6つの質問項目について「あてはまる＝4」「ややあてはまる＝3」「ややあてはまらない＝2」「あてはまらない＝1」の4件法でたずねた結果を投入変数として主成分分析を実施し（表8）、ケースごとに主成分得点を算出した。主成分得点が高いほど文化資本量が多いことを示している。

表8 文化資本

	第1主成分
博物館や美術館に行く	0.72
家には本がたくさんある	0.70
学生・生徒時代、勉強が好きだった	0.61
クラシック音楽が好きだ	0.55
海外旅行に行く	0.47
テレビでニュース番組をみる	0.44

因子抽出法：主成分分析、説明率 34.9%。

- 3) 例えば2013年の本調査時点において60歳であった方の大学進学期にあたる1970年代初頭の大学・短大進学率は全国データで30%弱程度にとどまる。60代以上大学開放利用者の四年制大学卒の割合が60%以上にのぼる本調査結果と比較すると2倍以上の開きがあることになる。久富善之『競争の教育 なぜ受験競争はかくも激化するのか』労働旬報社、1993年、p.21。
- 4) 受講申請時のデータと本調査の回答結果の比較（%の大きさの違い）は、統計分析Webサイトjs-STAR（<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>）の正確二項検定を用いて有意な差が無いことを確認した。
- 5) これについては次の意見が示唆的である。

▲ 大変エネルギーな先生の講義を毎回楽しませてもらった。PowerPoint を使わず黒板を縦横に使いポイント（を）図解していき、また所要所で関連知識をはさみこむテンションの高いクラスであった（2015年度OC受講生、年齢不詳女性※）。

6) S D法でたずねた結果をもとにしている。(1) 地域社会に対する教育サービスに努力すべきである vs 教育研究面で競争力をあげる努力をすべきである、(2) 日常の実用的な内容を重視すべきである vs 学問の先端知識を重視すべきである、(3) 社会人受講生には特別な配慮をすべきである vs 社会人だからといって特別な配慮をする必要はない、(4) ゼミナールなど少人数の科目も公開すべきである vs 比較的大人数の授業だけを公開すべきである、(5) 入試で「地元枠」を拡大し、地元の人たちを重視すべきである vs 入試に「地元枠」などの特別な措置は必要ない、(6) 社会人を正規学生としてより多く入学させるべきである vs 社会人は大学教育に部分的に参加すべきである、という問いを4件法でたずねた。それぞれ「vs」の左側4点～右側1点を段階的に与えた。

7) P. ブルデュー他〔安田尚訳〕『教師と学生のコミュニケーション』藤原書店、1999年、p.40。

8) 名古屋大学公開授業でも同様の効果があることが指摘されている。牧野篤『〈わたし〉の再構築と社会・生涯教育 グローバル化・少子高齢社会そして大学』大学教育出版会、2005年、p.311。

9) P. ブルデュー〔石井洋二郎訳〕『ディスタンクシオン 社会的判断力批判』I、藤原書店、1990年、p.22。

10) 「世界一高い日本の高等教育費」子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店、2009年、pp.196-197。「日本では、韓国やチリと同様、高等教育段階の学生のほとんどが高い学費を請求されるが、学生支援制度が比較的発達していない」。OECD編カントリーノート日本版『図表でみる教育 2014年版』p.10。
<https://www.oecd.org/edu/Japan-EAG2014-Country-Note-japanese.pdf>

11) この学ぶことの意味に関する質問項目は、「子どもの生活体験」研究グループ『現代教育改革の下での子ども・若者、その成長・生活・意識・集団形成』p.81をもとにして作成した。

12) もちろん、条件によっては大学の内的自律性と社会人受講生のニーズとの円滑な整合を実現することも可能であろう。牧野篤は、「〔公開授業は〕研究の論理に支配された自律的なものとなることによってこそ、市民に深い感動を与え得るものである」と指摘している。前掲『〈わたし〉の再構築と社会・生涯教育 グローバル化・少子高齢社会そして大学』p.321。加えて次の意見も示唆的である。

▲ 各地域での市民講座等で設定されているような内容のものではなく、大学で行うものは、アカデミズムの府として、多少高度な内容のものに設定する方が、地域にとってはむしろ意義があると思う。独法化して採算第一主義になるとたいていの学問はつまらなくなるので、学生は集まるかも知れないが資格取りのための実用第一のものだけでなく、アカデミックなものを求めたい（2005年度OC受講生、40代女性※）。

▲ 普段のままの大学の授業を受けていただき、大学の授業の雰囲気を感じていただいた。大学の施設利用について不慣れな点については気を配ったが、その他の点には特別に配慮せず、大学生と同じように扱った。普段のままの授業を「公開」することが良いと思う。（OC）受講者がいるという「よそ行き」の授業になってはならない（2005年度OC担当教員※）。

13) 例えば、小川信明〔インタビュー〕「地方大学が地域に貢献していくためには＝2018年問題を見据え、産業創出に貢献できるかがポイント＝」『時評』時評社、2015年11月号を参照。

14) 中西新太郎『情報消費型社会と知の構造 学校・知識・消費社会』旬報社、1998年、p.113。

15) Leveneの等分散性検定により有意確率が0.05以上（分散が等しい）だった第1因子・第2因子はTukey HSDによる多重比較を、0.05未満（分散が異なる）だった第3因子はGames-Howellによる多重比較をおこなった。

16) 大学開放の拡大を求める意識の高さを把握するために、注6で示したS D法による質問項目のうち(1)(3)(4)(5)(6)を投入して主成分分析を実施した（表9）。主成分得点が高いほど大学開放志向が強いことを示している。ケースごとに算出された主成分得点との相関関係を調べたところ、個人的実益因子（相関係数 $r = 0.15^*$ ）、他者との関係性因子（相関係数 $r = 0.17^*$ ）ともに正の相関があることが確認された。

表9 大学開放拡大志向

	第1主成分
社会人受講生には特別な配慮をすべきである	0.73
入試で「地元枠」を拡大し、地元の人たちを重視すべきである	0.72
地域社会に対する教育サービスに努力すべきである	0.65
社会人を正規学生としてより多く入学させるべきである	0.63
ゼミナールなど少人数の科目も公開すべきである	0.33

因子抽出法：主成分分析、説明率 39.8%。

- 17) 投入変数には次のような処理をおこなった。まず受講種別は公開講座 = 1、OC = 2とした。性別は男性 = 1、女性 = 2とした。学歴は非四年制大学卒 = 1、四年制大学卒 = 2とした。大学開放拡大志向（注16参照）は、各ケースごとの主成分得点を高・低に2等分し2値化したものである（低位 = 1 / 高位 = 2）。また、文化資本（注2参照）も同様に各ケースごとの主成分得点を高・低に2等分し2値化した（低位 = 1 / 高位 = 2）。また、4件法でたずねた質問項目「黒板とチョークを使って説明する講義」「講義内容の順序や進度を受講生に合わせる講義」については「あてはまらない」「ややあてはまらない」 = 1、「あてはまる」「ややあてはまる」 = 2、と2値化した。
- 18) 出相泰裕は、学部段階への社会人入学は減少傾向にあり、なおかつ「偏差値上位大学」に偏りがあることを明らかにしている。また、日本の社会人入学は「既に大学を卒業した者が社会人になってさらに大学院に進学するというパターンが主流になりつつある……そのような状況は格差をよりいっそう拡大させていく恐れがあり、また社会的公正の視点からも問題」であるとし、「学部段階への入学も促進していくことが望まれる」としている。出相泰裕「学部段階への社会人入学の現状に関する一考察——大学の属性の影響力の視点から——」『大阪教育大学紀要』第II部門、第53巻第1号、2004年9月、同「成人の大学入学の現状と課題」『大学と学生』第一法規出版、2008年6月、pp.15-16。